

については、直接二著からの引用に抛らざるを得なかった。戦前の史料は空襲により、戦後のそれは復興・整備の過程で多くが失われているから、通史全体を通してそういう部分は少なくない。

二著では人物を中心にストーリーが展開するから、当時の雰囲気や登場人物のキャラクターまで垣間見ることができて面白く読むことができる。通史のように生硬な史料類がたくさん挿入されると、どうしても読みやすさが妨げられてしまい、面白みに欠けるところがある。実証性・客観性が強く求められる通史の性格上、それは仕方のないことかも知れない。

しかし、通史が明らかにした名古屋大学の姿は一面に過ぎず、他に多様な描き方があって良いと考える。名古屋大学との関わりを綴ったいわゆる裏面史が案外、次なる沿革史編纂にとって最も役に立つ「史料」となるのではないか。先の二著に改めて感謝を意を表したい。

(名古屋大学史編集室助手)

専任編集室員としての「自負」

専任編集室員 山口 拓史

私が名古屋大学史編集室に専任助手として着任したのは一九九四年四月である。折しも『通史』刊行に向けて編集室が総力を挙げて取り組むべき時期であった。それまでこうした年史編纂作業に関わったことがない私としては、右も左もわからない状況で「限られた時間」内に『通史』を刊行させることの大変さを当初、感覚的にしか理解で

きなかった、というのが正直なところである。しかし、実際に編集室での仕事を始めてみると、大変さは直覚的に理解できた。それは、まさに時間との闘いであつたように思う。そうした中で私は、いつしか「予定通りに『通史』を刊行させること」こそが自らに与えられた役目であると言ひ聞かせるようになっていた。

予定通りに『通史』を刊行させること——これは誰もが極めて当然なことで受け止めることである。しかし結果的に『通史』は当初予定より遅れる形で完成した。にもかかわらず私は、自分に課せられた（と思ひ込んでいる）役目に対してある種の「自負」を持っている。この機会にそれを書き留めておくことをお許し願いたい。

『名古屋大学五十年史 通史一・二』は、総頁数一七八四頁に及ぶ書物である。元来、私は戦後の教育行政・制度を専門領域としている関係もあつてか、『通史』編集における私の主たる守備範囲は第三編ということであつた。編集室の専任助手は私を含めて三名体制であり、この三名が共同して編集作業にあたつたことはいうまでもないが、実務便宜上各自一編ずつを分担するような形態をとつていた。こうした分担形態は、各編での編集作業過程に一種の「競合関係」を生み出し、絶妙なチームワークを深めることにつながつたと思つている。例えば、各編の記述内容や表記法を調整するためのミーティングでは各自が担当部分の原稿内容を頭の中に浮かべつつ、「この表記法の方がよい」「その方法ではうちの編は調整が難しい」「他の大学史はどうなつていいのか」などの意見を戦わせ、時には険悪な雰囲気や漂わせながら夜遅くまで熱い議論を重ねることもあつた。そうした中で日頃のつきあいでは知ることのできないお互いの個性を改めて発見したり、協働作業で一つの書物を完成させることのダイナミズムを学んだように思う。

いずれにしても「限られた時間」で『通史』を完成させようとする過程で、私にとって最大の問題は第三編の編集作業が他の二編に比べて少なからず遅れていたことであつた。その理由はともかく、全編集過程において第三編

は他の二編より約一〜二カ月の遅れがあった。校正過程でその遅れを圧縮・解消しなければ刊行日程に支障が生じる。忌憚なくいえば、その時の焦りと苛立ちはこれまでに経験したことがない部類のものであった。「より正確に、より質の高いものを」という研究者的欲求と、「できるかぎり短期間で」という編集者の自制心との葛藤である。この葛藤への対処がどのように受け止められるのかは『通史』に対して寄せられるであろう評価によって判断するしかない。にもかかわらず、極めて微力であることは十分承知しながらも今回の編集作業において可能な限り自らの力量を注ぎ込んだという「自負」はここに記しておきたい。もちろんこうした「自負」の背景には、身近なところでは篠田弘編集委員長・編集室長、片岡弘勝ならびに吉川卓治といった前任の専任助手の方々をはじめとして、『名古屋大学五十年史』編纂にご理解とご支援をいただいた学内外の多数の関係者の方々の存在があったことは自明のことである。一専任編集室員として、この場を借りて心から感謝の意を表したい。

(名古屋大学史編集室助手)

史料とワードプロセッサ

専任編集室員 中村 治 人

日本語ワードプロセッサなる電子機器を、これまでに三台購入した。初めの一台は大学三年生の時で、卒業論文の作成から修士論文の準備段階まで、ほぼ三年間にわたり活躍した。しかし、修士論文作成にはいささか実力不足の感があったため、同一メーカーの最新機種に乗り換えた。間もなく一台(代)目は人に譲った。このころは数ヶ